

源氏物語序解

總論下
凡例
首下

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 6

卷之三

卷之三

抱論下

七
吉

此物語のちうまく本ハ源注拾遺玉小稿かひもひふとく・河海がぞ大抄
の抄は始なむる。おきども安沖のひもひふとく・暗記の様などよや
あん某の書ふうとてし出でたのをよハシマフとしてねども
多く、又おの向なども、お集とへられえりよろしくとがりあります。
きうちれすやへたう、ぐゑん草むらへ、やくは花鳥傳情あらう。
大いに海よよれくもよく、又得する件クダリども、かうべく。
ひこすくふ、後ひぐすく、やくは、晴花細流明星孟津底に入楚萬冰一
露湖月抄あどなれさゆくをもとと、幸居翁のひもひふとく、おとせ
ざれ抄どもと引出、またづ考を加へれむのとて、まことに
ぬをたず・やかみ細流ハ一ああてやまくもとく、縁のおよりと

りのまゝれども、うらやましき御月おハ、師說も今按す。さうぞくの御
うちかうて、閑ゆきのちうるばんとくの御どもをうべて、うつよほ
したよ徒つるかたうべ。されどもちくへ、祇江入楚よりめん出でりとさんゆる
事あつて、楚より門から出でる。いはまくとくに送りゆる事ある。此
抄ハ本文をゆゑて、手本の板本を傳せしるが、今世よりさうす
あたうて、其あぬひな。さうどなつて、いふよどやうどわざあた
よし、玉小摺本へ、手へらむるうごとく。さて、の後は、とくめて、
そりれ抄ども、がむかへせのとくろ、のうふるねふくのねふく。
時代もありすへ、近うとがむじくと、りくへどものある。ま
さうとくと、まこというと考へたりて、たゞ中古よりうふくの歴代へも、
よハあぢたあき一ツの癖ありて、行本のうふも、秘説がどひひて、さするか
なたこまでも、秘らる手本なり。あふがくおどもとある。一人二人よ

ゆく秘傳ヒヨウへ。あまゆくへよりするがくもとあへなかり。あ
し、小古の書どもを又集めて、事の説を考る。など、の学アモレも、もつともうなう
し、ばくかくと、一やうふ考へゆる。と、暗記のまゝ、注シラメキのまゝ、注へつけられる
數いも多き。あふぞあうべき。其の公事儀式、或ハ衣服調度の故実など、見る
やんことあれば、あふて、沿きへゆることある。じくは、紹不誤かく、わざく
なうと、それへ古きまと相へて、かられど、ないだへくわざく。
もあり、案ふのあ便つくる。一條院、天皇の御時より、とくの年と
き、もと、令式の序制など、やうへあねさあふあつたるが、兼々建武の
乱きより、公内のうりであし。ひくへ古がめぐるて、やく。住者へうられい
まうるをも、たゞ乱せあつて、故あとすとあづき。かとすつも、もとすづく
あれる。また、別よちうまくをねざつて、たゞふもあくねを。既小注
教をねざつて、ゆく。よもうたる本どもの知きびしむべひうぢ。

此をばよみとすがあれ説ども、又ひむたよひまよこぐに。古今ハ湖月
おとすりゆくれども、舊注と称へて大いにハ漏モラ。これど事のあれ
達もざきすへ先、舊注より是よりてゆくべにことわうたまシバ。ナホニニをも
あうつけぬ。さて樊冲カシウの源注拾遺ハ、右の舊注どものまごとる條ども
をあやしく古書アガシフども小考へて、そぞくすましもを論ひる。わふく。
いとおむりくめでて、此人ヒトがよぶつゝツツ、せしがるひくヒク、かて、之等の
お集アツメひよの既タマかの秘傳ヒツヂンなどやうの説よハかゝる。古せまく小れ然し
て、今實ヒツを考へ合せられ、浮ハラハラともひくヒクもなくして、近カキ
考證學カウジンガクもどあひ原ハラハラ、さればこの捨送ハラハラ、せぬ也ハラハラれやうも
ひく改ハラハラりぬもど、されよもと、新注カウジンガクと早ハラハラけく別ハラハラて、あくまきど
とこの書ハラハラ、大ハラハラく舊注の誤ハラハラを正ハラハラきをのせんとせられ、
うけて用あるまいかとすか。されば免ハラハラをとりとらぬとすか。

さるはあざへるの論ハ、門出へたり。ギ又よもざきをあづかへ、あづらへ候。あづ
ちく紫シキ、近きころねかきづくせふにまわると。いづあるとふう。つづり
かききる條ツキどもあづて。じまよのまれる字シキ。又も小様、深泡附滴など、
引き下り條ツキども脱オキ。まこと彼タガあり。まろふどもハ写シキすと解爲ナゾトキ。す
そりて引くもあづば。さるからて板タハとあひたと粉ヒバクよべう。また、國部翁
の新シキといふねり。され愁考一毫、此家七論とせふ板タハかきづく
くるが、大々かみせ浦シマウラのあきと、王小様ウエノコザケのうづとし、や矣ヤヒ、ま
ちうきくれほども筆タハかきづく所シテある。さて、じよとシヨト不従フツウひて、なやこれうち
まゝ加カく文法モンガをことやりますけとシヨト。そのよハ九例クウセイよいづイヅと。
さて相シマすより次シマめちシマめりやうへ、舊注クシイズをまごへ用ヨウひて注シマせられ
く。も高タカほと今按クシマとおきシマせんシマたてて、ひづり、紛ハラハラたと。彼タガ

三十一

ちのが只見川の二本のうちよハ別記のそとる。後小改め
所どもけり。わの只見川二本のうちよハ別記のそとる。後小改め
ゆふとて、ちくまもくらうをすむとある。また一本とて、かくもほ
考へられかとおひたすらむ。もともの別記のそとる。写
ざまいとこりて、達者と所とあけ。ばんとたつて、もの稿本と
くやうをむひと用あつ。せきの大むか、かのね考ふもいれらう。ご
とく。たゞハ詔諭のそとくとあれる所とあつて、いとも凡論ふどあれ
どれもむかとあつて、かる條ともハりしらず。されどやもととくぬふよ
はうべにせく。そのうとくとくりつ。次小加藤宇一力伎の雨夜物語もみ
祠といふのであり。こそハ帰本がみの字と解ひて、ふくふ俗傳をくりぐく
注へり。もと説ども、今之國教翁は傳へらるるあるやて。教翁と曰ふれば、
今之國教翁の小標があり。おまく、お傳どりある。

ひきのほうひざあハ、やくもよて始てあまうふなまうとぞいもほ。まうの
なまびだうむすのじやう。人情のやまくまみは。深く考てねまくわ。ト
とくゆうことまくへ。や境どもひとわざやう小強説とすやうことひと稀。
すべてのめちくへのふりあへ。何年の説かても。人情のやまくあると
ままたまびす。やもせぬ。作つてのまへりも。今の人れおまく
所までも。深く名ひもうて物をざきだ。理ハ理とくと。がふさなりとばうけ
あぬりのあらば。此翁の説はまくまうとせんじまひく。がふとおだやま年
されりまう。絶きばせぬ法りでてよりこひく。注とく。注のかよハ。このお
小擣よやまうねハひくもたく。紹りあとのまくまれることとくられ
まうとおがゆるまごこの小擣ふるがんあくわる。こまきひまわがくぶほ
むりやうあきど。他のおどもとくべんで。ふくく嘆ひまくまく。強きをせする。い
まく年老てのせれりうふて。お擣ふ美くうあ。注釈ひとくふにして。

まくうたこまくだうりよまづめられくるのまかハ。ひじりあくまくうじに
やまよたんある。それば若葉をまく。むひと彼説をとくめらる。うど。
末摘花表トウトハ。がのぢちくまくをみむひととね。彼説を考めうると
のわだハ。筆書き説のたまきだ。又他の抄どもよハ。ひじりくも。がゆうととの
まうむ。書く筆へんらうづくして。拾遺新釈のをもととくども。取ざる
ことハかひやうて。やもせぬとわぬを。小擣ハ。あくいうよざやんやうまうす。
大くまよひ出てあげてひるみども。さるハ儀もくがるざらとて。弊まく
のまほよ。あがむやうかて。ひととせびく。やもせぬひととく。がくまく
をもせぬとすあまじば。あく考へまくのらまく。まくのめでまくよ
みひくまく。初学のまなぶ。みれかくまくとく。やうの數もあくべーとく。
くふやむとくとく。おとく。アシルくまくへてりくまくとく。おとく。さ
て尾張人鈴木氏がかけ。小擣補遺とりの二卷。あく。小擣の中ふりそれ

とるべとす少くば。まことによひやう。まことやゆよハ。江戸の石川雅望と著
せり。涼注餘滴とりすむのけり。湖月抄をたどりて。まことよもぐる注ともを。
むひと拾遺新釈の二およびり出で。がくづく今按をくもへ。寒くれいき類
例あそびのせり。所くわくわくぬがくと。や書ふありせて校へ。タカ
を引直し。又は。の文本を挙げて。ギ文をも校へ。含せ。又語の注などは。
あらわすね傍どもの中より。や類を聚めて。アツ
ぞ。あやうこまうご。せ近きをかぶりて。やくの注
きまくぬねもきづきど。ももくぬを。がくづくとんとて。右のがくどものがふ
とれ。やうくづくともを。かくみぬをひで。行つての豆がく。やくよ。
むひく秋をありの。つまう。まちくの外か。安藤為章の學家七論と
りあひのけり。必見也。此人をうたわどより。此の後をぬく。もうくの家説を

もや。後小此を云ひ、日記を讀く。おのづから紫式部のいふ事とさうしりば
あらう。うなづくよ。そまの後ひつて、卷中のおりあらへ。上ふもあらへ。引出
する。とくにねふて。此、ねほの大むかを説く。彼、日記をせぬほより念きて。或の
才徳のいみ、どうりし本を称し。又むりよくのにどもふいもれひづてと
論ト破アモ。いともあらはれまつた。但一む小柿ふくの大むか。
人のすうども化ける例をみる。おほとつゝの趣を以つて。といもきこ
ることあらず。たゞそぞの舟へどあわくあらひの。されど小柿の説もあらひ
よどやむがゆる。すゞりあらず。さうて、さうて、上よい。が、じ。とふかく。舊說を
もふき。始のねよて。源氏拾きよゆく。ぬまく。また小村久備といふ人
の著である。をみき草といふ。あら。こま。ハエ。小柿ふ。系圖を以つまく。おひ
き。まき。ど。いとす。あくてもさざび。ど。いとまき。うるをあらぬと。おひひく。此、ねほ
よゑ。まく。の系圖をあく。あめ。う。又小柿の年立。系圖よなづひて。今也

委^スした年立の圖をもほして塗るゝ事。此^ハ系圖と年立とみすハ
かのそれとひきふぼうて今ハおふつて出で。彼^まとどうして又金を
だ。さて又熊海氏の源氏外傳とりあがめのう。此書のよハ小檜小説^{ミツ}
トモトモ。いもかる外傳^スて。物語よりむはまく小用なにあり。これハ^モそ
くみ京ふくやんとみだらう^シよ。やのぐさう。經濟の儒學を傳へ。財
のみね傳^スよとて。もともと解^スるゆのと傳へすね。がふまる^{シテ}のわと見る
て。うべく^シまやる條もわざれど。本文はあぐ^シぬのぞ^ムたま^シバ。今も
大き^シう^シて哉^ス。

引奇の事

物語の中に、うち冗談をうご一句をうりり出で。半の餘談をうごくませ
くる。その中、おをせりよう引^クすといひある。この門^ニあるふ種ふゆをもして。
事^ハうれあるふ種^ハもまだ小使^{マサニ}ふくわいく。がふね^シりする

かどく^シきな^シで^ス。かく^ハうひよ^リるキド^ス。と窓^サす。ふし附^スり。あす。
またと^シき^スる。う^シハ。古今集をもぐめて。後撰拾遺^ハ帖^ハよ^カて^ス。
又この仰^ハの時^ハあく^シれ。あく^シの集^ハ出^スる。まあると。奥入河邊
あく^シかいあく^シて、着^スき。や渡^スの^シお^シも。次^シよ^シ門^シへらま^シく。御^ミ
その引^クる。おども。その^シま^シとくべ^シて^ス。されば。詞^ハきどう^スふも^シく。が
本^ハ入^ス出^ス。又ハ行^スの集^ハ出^ス。お^シあ^シも^アりて。いと^シう^シ。ま^シく^スは
持^ス新^ハ小^シ持^ス。かく^ハ小^シあ^シいも^アれ。ある^シ。附^ス湯^ハ付^ス小^シして^ス。
かとく^シて^ス。裁^ス。すれど^シのこきるも^シく。まゆ^シぬ^シも^シ。
きる^シ。新^ハ小^シ持^ス。注^シ者の^シう^シふつ^シのせ^スれ^スや^シふ^シい^スれ
く^シ。御^ミも^シ。今^シよ^シせて。お^シき^シお^シ集^ハも。お^シせ^スよ^ハあ^シて。に^シし^シん^スを
引^クる。ある^シ。或^ハ今^シ世^ハの集^ハある^シ。写^ス。ひ^シあ^シて。却^シて。さ^シく^シを
き^シべ^シき^シ。ありあれ^シち^シい^シも^シ。されど^シも^シ小^シハ^シり^シ小^シ持^ス

おどりて見ゆせばまると見てなうとも定めども。又其のうれいと。さ
と引うへて用あふれらるも行ひ。御内めの御ふくもひありとてとくわれば。
そきハ今りあづだつふあづば。やかまよほするがどじ。また又湖月ねあづよハ。
引まのふよ。一から点をうくる俗ありふ。やかまよほするがどじ。又湖月ねあづよハ。
あづ。引まとつあづや。そのまをまかざくかざきバ。引物のうちぞうのます
ゆく。ぬまうれす。そく解ハシムヒヤマクの詞をこうてうれすとある。も。
あやどりて見るかなるハ。教例のうどひ。されば今ハ此、引まのふおづ。

一鳥をうけてうて。モ解ハタキ。モ解ヌヤウカと有。

准擬の本

舊注よ准擬といひてありて。相臺灣帝ハ醍醐天皇小准^{ササニ}を。朱雀院の帝ハ
村上天皇よ准^{ササニ}へ。源氏君ハ西三條右大臣光公或ハ西宮左大臣高明公小准
す。准^{ササニ}。又大臣の仁貴院ハ。河原院左大臣融公の河原院小准^{ササニ}へ。昂本

の中川は家と。落葉^{スダコギ}相如^{スダコギ}の家よ准^{ササニ}かなどりの影ひのす。これら
やうをいひてゆく附也。似^シくもいとおやうれど。あみがちふくも人のま
とさうあく准^{ササニ}へ。とふあづば。ばつづくもあくきひ。彼此えま
へく。やかまよほするがどじ。まかまよほするがどじ。をひもくよハ。かくすくもかくす
たまふ。又ちうひしとあくまくハ。まくでなされば。まつひよひづく。
まきびと小様ふいとまく。とてもかくともまく。べに半身あきバ。今ハ寒く
りしき。日本紀傳局考よハ。源氏君を嵯峨天皇小准^{ササニ}。相臺灣帝を桓
武天皇^{スル}。朱雀院の帝を平城天皇^{スル}。冷泉院の帝を仁明天皇^{スル}。天皇小准^{ササニ}へ。も
ううとて。似^シく事じども。」かくしてまくことあり。これハ相臺灣帝を桓
武天皇^{スル}。朱雀院の帝を平城天皇^{スル}。冷泉院の帝を仁明天皇^{スル}。天皇小准^{ササニ}へ。も
ううとて。似^シく事じども。」かくしてまくことあり。これハ相臺灣帝を桓
武天皇^{スル}。朱雀院の帝を平城天皇^{スル}。冷泉院の帝を仁明天皇^{スル}。天皇小准^{ササニ}へ。も

中川の名もや附の紀伊ちうが家。行ぐへ院も、いへ院と見てあるべし。
あつまてもえまともくらんでらあへぬふどもあくまへ。舊注よりそれる
半をされぐる舉る難もあるど、そへやむと説するよて。こめふ小こ
とくらぶくめ。そして又相をすふ。せんの画を。さる院のかせゆひて。伍勢
せくふよすよ平をすくらは屏風のすあるハ。伊勢をみるされば。實より
ゆかうの海か。されば亭子院の事は次ハ。延喜の事はすせば。相をすらは
延喜の事は准へて。もりよびだらうとなれど。ゆくと。それからもには
名すたは屏風か。せぬされ周ふどうせむかへて。これより
て相をすを延喜の事は准へる證ふハあくぞ。須磨をよ。千枝事則といふ
きうにのとくも。やほの上もとひへ人あくべをかふ。どうやる。敷ひ。
さきじばさうのとくもをば清くさひすて。ひきあへる人へと。がくふ直の
人ゆことやひあへてよむべたなり。

卷々の名どもれ事

物の法の事はものすへ。され来ふかくもする字や詞や。がくとも
よ取出く名づけ。諸抄よひれ。うござと。これと天合の
四門よ准ナラへ。も詩の名篇小比ヨツむなどいをき。舊注のひづくとも。も
新注どもよ准へらき。されば。こまもまくかひそば。新註の品。本來ふ。
舊注を今へくれ。ふよ。物の法のうがども。ひとからんすよりつけ。ると
坐まふ。めど一つ二つ名や。のこ。あらむ。おらんや。古たまどものうのやう
も。みりやまくふのこ。がくもやまくも。まくばかくべー。とひれ。ハ
まくとくらむ。されども。れよく考。ひよく。うべー。ハ。はくわくのこ
まくひあく。一キうと。かがゆ。も。こまう。き。な。う。こ。ハ。まくひまく

人の名れ事

此の後ハカタトトお不うるやかすぐて人々の名を記すべし。たゞ
そのあ後れ何つきよくその人れ事とせやうやうにわかるハ、まこと
少ひみどりた事とりがべ。されば朱雀院のみど、冷泉院のまがどかど
すうじむ。さあうわせまい。後かされおもじりましれ名をきてやし
うるふて、実ふせちまつまつ、朱雀院、天皇、冷泉院、天皇の御本ふいあ
む。さう惟光良清時方あどひよ。二人の名はあまど。ときもあまう家
けめたりる人よ。うげある名をうきと仰りくいへたうきバ。これもれかうの
名ちうり。又よもいへるす技常列などの數いハ、實よを一人とすゆと。まれ
さあよよけてこうかへる。のこなまくば。おほのすぢにひきくもあううね
半なう。されどもあすくみえくる人れ本なればひいて名かへば
こうちうざくらぬある處か。かりふともへーくども、うごあう。うきと
作者のほけれるも。いとくとえうび。半のま處よりてハ、や隣の處と

帝本とも二やうふいづく。さてさてうにひきくも。あ
らび。さうとあふようつて。それ本とせやうあまどふつけするのうえ。
北村久備がすみ生草の九例より云。帝をそぞりあくせ。ぐくの名を称へ
りゆきらう。先相手。帝とよハ相手。小からくある帝なれば。後のゆき
をよむ人の其の帝とよく相手。かりふ名附する力の。おほの御手相手
帝とよく相手。このうちも。小内。大臣も相手も。昔人ともあく
あきバ。何の大臣。尚太納云と。かりふ名附。せん人をよきうちある。かく
人をひひきうつ。おほの御手。始よりおせずる名と。おほと
よむ後の人に。云ひやうする名とよきうち。はうめの御手。おひやうめ
光保氏。匂兵部。大内。上。夕。朝。上。あど。よも。人。名附。ハ。秋ね
中。ま。槿。夜。院。かどり。秋ね。秋ね。ゆ。を。おほの御手。ハ。秋ね。は。かどり。
きて。秋ね。と。ハ。や。う。び。槿。の。夜。院。も。朝。朝。の。御手。と。み。それ。朝。朝。の。御手。

モ標をつけて、キミバ弔本卷よ附中おのなぞづれすよみる
女の半をほく所よタ部とちうてる鄰れごとう。ときハ後ふタ部
をみて、タ部のうちよみて女たまきだ。まづあらまんの
あくまぬうちよか。後の名代ひきありうりて、ハ作りめのふ
よひあがたく。後ふあくまう出づる時めづくをうかんとがまへ
られむ。まくはうあひくいとあぢれす。まきば今いもる
かうて泣ききど。さて半てかのかおどくはりあきうりんのなうくふ
りうむべきと。既まの御どもよハきのととまづらを取うて
泣きう。されどやせりゆをねぬちとぞ。かとよりゆやのとがくよひあ
らじ。けまどくせぬほを、うまく候試んとありかくハ始よちうまくふて
其のまをせゆかれて。さて後某甲ナガレ、某乙クガシ、河などりよとをもあまね
かとく。文のまとよすあらもべ。いひあらじめでくくゆもくろき

所ともかねたゞく。

年立の本

〇五
十

此の御代の紀年よりハ、主小柿トシダよりすまき草ふ園をつゝうて、いとく
あきよもれバ。そきふやづひて今、ゆきだれ、くねもじわなむべ
きと、さて年をハ源氏トシの齡リキをもとては、けやくすまのたるやす。
ゆきは、あれ年也をもり、あくまに、彼者のもとひあつて、年とからくすり。
そきハ先ツリニシ、相重ツカミと帝アメノミコトとの間シカク、ゆきのあくま、相重ツカミをハ源氏トシ
を付タテて、そきをかくらゆきまどなきバ。たゞあふたふきよが、ゆきと。
相重ツカミをくらゆき、さして湯ヨシア。そく、花宴ブナツイと葵ヒナゲシ、との間シカク、一年
ぐくぐのゆきなり。そきハ相重ツカミおつみゆきせまし、朱雀院スカイの事モノに位
よつまくわざの手ハサウエあくをふ。こどもとやくらばんをくみて、もぎれま
うおちあくあがづの手ハサウエを委ツルて、いとくのまどもあくて、因

すらの重あらべをば省うるよしよももれ候ど、省うるよ
かあきよせのかもるふくなり。その次ハみをうくのまこと繪合トシダテをと
間ふまこ一年うわごのまか。こまこハ朱雀院の帝わうおませのひ・冷
泉院のみくどゆ位よつせきみくどのがまか。またやくと若菜のトシを
よもよあくて年月もうきねうむとどゆ位よほせひて十八年
かなくをまひね。とある。とく月日がありてとうゆ候よ。源氏、元亨二年よ
そ單タタケまで。單タタケのね落ハラフとくめ省きて。單タタケ六の年・冷泉院の帝わう位
ゆづりのをかきくわ。こまこゆけ代ハサウエのかくわぬか。も次ハをくにまえ
こまこ六源氏ミツノミツのゆふきば。さくよ論か。匂を夷ハサウエと匂えと
の傳ハタチ。井川と鶴林カクリと鶴林カクリと鶴林カクリと鶴林カクリと
くわあきよ。このこまこと年えみあづくべ。鶴林カクリとくわよるる源氏
をまく。ハサウエの歎トシダテとおひて一づくふあくされく。また源氏、元亨紀年

○五十一

いきひやのぼつめんよしがちのまへて。つひよるあせまふ
りうて。太上天皇は准へまくわせまひ。六條院へ行幸
のすあ。さかどもあらわせまるとまつてまつてまづ。まづも菜、
まふりうて。伊伎ゆづりうらまく。こまくのう。朱雀院の御子れはまくとあう
く。女三の御子れおこり。六條院の御子れよ。よつてぬまにまく
ち。御子れの二三の御子れ。相手もあら。女三の御子れが
をいふまく。あまごと。ねみのねれやがれ。六條院のゆふをつゝ。さよまく。は
うけまく。まづはよつてぬ方ひまく。さて伊伎屋をよむりて。まづ上うせまふ。是
生産のゆあがれよ。まづうやのゆふ。まづまくのゆふとまづまく。
さて。やく處よそかまくまくとまづ。みかが。女三の盛衰哀樂のうへふづて。
涉代のうへふとまづ。まづらめらめらめら。年次ナミを省みて。こちもあへ
ねと。やまびこ。まくまんがねの一つれ大綱をうちまくして。阪京小年月の

往々く半を立てれど。法たゞぐみやうと。行かへるのひづゝるや
あくさんされど大うきハあづくらへどもやだゆ。

系図の半

此れ修よどむる人の系譜けすも。用あくことなれバ。一やううかね
あくべー。これもすれぞれ子孫委したよめづく。今ハ省きつ。こじかのまふ
ち。皇胤・大臣・族・卿・大夫・族・系図あたし人。どうよつてかて類をうて。され
どうともハあくゆども。おほとよし方よそいそど。これよお主客正副あづの
法をうそせやたて。あくせざればうまく事じもれやきうる。もくじ
を。きくやうにわがむとくに。されば半び一級の主と立てるハ。先源氏。あると
論あ。これよ對へるハ。がくやく者。意みあると。とふかくうへ半たゞもとゆえ。
その内やうり小寺女姓のぼくをやう出てうへる。おきバ源氏。とほり上
とハ。お伝の主とある人あり。さて源氏君は相前てハ。致仕太政大臣ヨリモアあり。

又紫御の御對へて。二條、太政大臣弘徽殿、宮宿の一族あり。こゝより
とくのまくら。源氏君の一族とハ。古中よりぬきあひて。彼此相争へ
くるが故のおり。たなきバ。客の法なり。まも朱雀院と冷泉院ととく。
やあれお戚のひくうふすうて。事をうちつり。これなんぢ。物語の大略。オホカタ
趣の立がぬあらう。さてやうや六條、中興院の一族。并また六條一族。
さくハ明石入道の族などある。あれはまくして重くへきまとある。まく
よハあくべ。やれおじくハ。行こみむひとある事れど。すけふを出る。あら
丈よりよづきゆもあくべ。松生とんかく。よのよづきゆる。法あくと
なまじ。まよひとよひべう。そのまくふ詳。まくをくべー。まくまく
宇治のまくふくらへども。幕大將を主とく。匂ふをあひ副ツヘ。是
六條院よ致仕大臣を相前て。こゝにハ六條院の内すと。おるゆま
のゆすとをおおへて立てるのふて。大うきゆだ。よどふ並べう。あくべ。うづハ

著大作をもつてゐるおおゆき。さてハ、主の批考をうちをその客として。
かのうへ、かれさます。なほこまへにすが。さあ、の法どもあひど。
そよも、前小洋に詳じゆせば。こよハ、とて大むひをいふねへ。されば
系國を立てんよハ、がくみとよくらひすへてやる。併し、それハ、お便を獲
べたうめれ系國あそび。そよ、小つての用うと、ハ、がやうの取どもを
えんああもとぞ。せんかくおもへやくなり。

此、お便小稿の法則あるキ

このお便れを、いふを。へあふいひをさんハ。とせびと
かきと、あへて、立て小あひと。おもへいは、のいひもあきねハ。
せう一わづか、かれくるゆよハ、あへて、やうを記して、しりも、あす。
くきの法則を、せび構へ。がきするかのとおびへきをば。さて、この
法則といへ。我國のあすよハ、いまだ、へて、おもなされば。何事代

ゆの法則といさんやうもなかまど。かくのま、文章の法則
を、いふと、立て。たゞ、とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
その法則もよられ、おもへて、かくの文法といふ。
も、これすよハ、と後せよ。盛ふい出。せせりとば。それよりよろとと
も、誰も、うけあへだ。とて、あそび。とのめくの文法も、ち
と、あそびだ。とのめくの文法も、あそび。皆、お文のいひとを
カく、おもふたうんとする後、人のがくふ名づけて、詳サタしよ起きてるお
も、おぞて、ハ、とからみれ法なり。されど、おもはれ文どもハ、みづから思
ひうきて、かざつても、後より、おもへて、よとせり。法則
どものあくこよりて、おもはれ、かざつあれば、法則と、いふももうなつ
る。あそび。おもはれ、お便の便りぬとも、おはなしを、おもへんと。
かくのま、おもはる、お便の便りぬとも、おはなしを、おもへんと。

をひきゆくやうに思ひるよ。かまひば。おのづくらむ。ほのうつるまへんみと
あへば。また。がせるよ。うまぐれ。司馬遷が史記の法あり。あごりすとも。みな
がくよ。かあじふと。りくべぬよ。や。されば。とて彼と此と。語のとある
本のまよ。いきくらうる。あきよ。あくび。ちよ。彼小なひ。まよ。どは
りよ。ざくび。かく。いても。おひづ。がく。も。皇國ミシナニの学者。ども。例の洋小學カラ
とよをいきましく。おのまきと。那人と。するもあく。あく。一。こく
の論といふべ。ともく。空論言。あく。の文と。りよ。の、祝詞宣命ノリトと。お見
て。お外ハ古。のせよ。あると。たゞく。お事。を。記。すよハ。すべて漢文章。と。う
そか。すく。と。誰。も。よ。く。か。る。が。と。と。御。ま。く。の。ね。ほ。と。よ。お。出。来て
よ。う。ハ。空。ま。く。文。章。も。か。づ。く。お。く。わ。く。と。あ。ふ。う。さ。ハ。け。き。ど。せ
物語。よ。う。あ。つ。う。の。ね。ほ。と。と。小。か。の。お。い。よ。び。と。く。詞。と。つ。う。の。み
かく。いま。ご。く。文。章。と。り。よ。び。と。が。れ。の。と。あ。ね。を。お。ね。え。と。ぞ。ま。く

やまくらうといふとひざとあへんとゆきはうべの人の
よいをねりくらむとゆかへたのづく其法のうらやがにゆの
よとあへば。さてもれ彼と此と、半のほねどもかのいひざゆも。いそ
くからむ半とあきばるよひされがくうつがんとくとももて
似づく、あくまびじゆうとゆだ。彼ふかううといふん、まへいといふじゆ
むがくとく。この白園がたゞれ文まとよびたねら。物語をせせ
る始めるといふよハ。まもあへだとハ誰ういふん。よゆのやまハとまれ
かくまれ。今些おほの文まと評して。そのめぐれたり。或あへも一出づ。
文をくふまれまつたともせんとするハ。まのづく法の名をくくと。その
めぐれに本をいとぼきバ。何をとすがよてう本をとふまん。とくまくと
やほのちをくも。どうふ事く仰へも。じとくかくめく事くよハあきど。かれ
漢文章の法則といふと。既ふくまも傳もうれバ。えをかへてソシケトモ。

達うは彼よなうるねかへとひもん。まきとバ。りくづくことふもく
ひく。なうるよ紛らう。せんよりハ。とかのりぬく。れ後、せの文法を
よいへる則よあへひがつとの名目あるとも。かくそばは傳て評する。かんく人
あるきへりくな咎めを。そのうへこまうとおの手でそぞめてあひつたる
本ふもく。安藤為章が紫家七論よ。もやく千鶴をえりぞくへく。
上畧全篇ハ富貴温潤の氣象みて。官家の文章あるじ。中少山林出
世あり。市井田家あり。莫園哀傷あり。閨情風景ハまごとくよくみて。情を
うつて景はかくどる。まのうづくも人よもひ。所よ遊ぶがどし。
全体ハ傳すと。又おづく序の件う。跋あり記う。論あり書あり
て。諸体あるも。彼も本れ本れ。持ふ奇妙あるじのなれ。為章
嘗々其章段をあへさん。仕へる。序して云。論破あり論承あり。論腹
あり論尾う。麗より細より。俗より雅小やか。繁より簡よ帰。波涙

頓挫照應。伏案などりよがく文法のづゝ備ヤ。す氣縁ハ悠揚
とて寛裕小。文勢ハ圓活とて婉曲なフ。是ふ處の多くビ。一教よ。史記莊
韓柳歐蘓よひとくもべ。女の多き事とめづくにあやしく。或教ハ誠よ
古今獨歩の才とりべ。じよへより聲情といひあらむ。此も清少
納ちう才氣狭少フ。さうじらきる詠あくつよふくまげもんかの
なり。因自も説べうべど。已上五堂序の畧云々。とく。又思教翁の新教熟考小
も。これもあくひく文法を教んとおのそれと見て。其を若々き
くふよ云。文義よ。おあん本のことを前よ后よこれを生張本と
も伏案ともりべ。此二事が一の違ハあると。大うも因下ときば互ふも
きり。又お文後文相對へてかくと照應とりよ。又其傳と即時よことくと
頓挫とりよ。又文はある人相對して。互よ應第をかよ化者みやう
を評せる類とば。記者の語とりよ。俗小字子地と。又其傳をど。誰が詞もと

かげて所ハ。或ハ源氏。或ハ上など注せり。又文の句絶よハ。備小点し。
讀タテみハ中ふ点せり。達タチ小タチ小段をバ『如些ちよ。大段をバ』め此記きり。
大段とくも車の繋ツキ。これらへとよ例あた半もあまど。んとよとよとむ料のそ
なり。その外右は教傳のかみも注法あれども。本文を注するはめてかく
ききバ。大うも成筆もあす。かく後世の注は小矣あると。よくもと
ほけくらむべ。先入のあを主とて。不きよそくはくもくべされども。
熱くかくくばやすきて古きよつたく。誤まるハ取扱むべ。とくそ
きくるなどふより。又小様かも。こまやうにあらむよべたよ。あらくいそれると。や
や法則の嚴ホラうあるにゆく。だくうたまく。園部、翁の立をあくわる法
よ。今が一章くらく。さてこの評歎をばよりつまよりとてその法

則のやうへいづかといもんよまづ一部よりて一部の法則あり。一もど
小一卷の法あり。一段カリごとく一段の法則あり。一章タチごとく法則あり。一句コトごと
よ法則あり。いきある事比まで。あやれにまできりひる法則あ
り。その一部よりて法則とりへ。時世年月の移ツツると經タテと。人事のゆ
きりとも。依律スヰと。あはれの趣を作アハレふ。時を年月の移りゆく
絆ハシのうよそハ。上條カミエダからづく。まづ相應シヤウエイされ大佛代オヘイを歎
よ朱雀院スサニイのあれ佛代オヘイを歎タマフ。まづ相應シヤウエイされ大佛代オヘイを歎
帝の傍カタ代タマフ。まづ中間ナカラ小必スビ。おはれのあれ空クモリ年タメをされ。ま
さき法則なり。又源氏タケシマの齡トシをかひく。すまきまくよつね。よとみ十
年タメの半ハーフを五十四帖オヘイをつねて。おの佛代オヘイをかわかへ。代タマフの
おりがたよよりて。おもひのう。不盛衰サヌオトヌのうきをうれし。うちられ。これ法
則たり。がくとく。小隨カク。さあ。ぐれ人のうへをも年タメをかひて。たゞ

相あがへぐ。齡のわざはちありせむる。是亦法があたり。字のあらふ。ま
葉や草の數をみて年をもじく匂ひをもべまする。これより法判なり。
かく定めおきて。さて人をあらうりでくる事どもを。緯ヌキ小あやどり
て考りやくほほり。あるべから法判あり。そと上條アシガタよりもくとく。先アヘル
源氏スニシマツもとりよとく。一派の主と。おもきよ對アモリがくやく。見ミム中ミナをも
出る。こゑヒカル先カヤシと赫カヤシと体對アモリへ。山對アモリの法なり。松毛スモモも若アサヒもすハ
かくろへすある。あふ。そユカリ所シテよけ女メヒコの里アヒをとりゆく。こゑミムの花アヒ也
あり。小野シノとひづる。ひづる者ヒヅルモノ官カミからうのどんたのなま。バ。始ハタハタ源
氏スニシマツよ相偶タヌひづる。すべてこの上アヒ。こゑミム奇對アモリとりごー。かくちうくは
いづる先アヘルと赫カヤシとおもくへんよりハ。今一まへんあくやくて。かけてしまね
結シタク撫タヌたりといづる。さてその先アヘルすまを傳ハシマふ。まつ大アヒると匂
丘シタク。まとめなまく。考アヘルのたゞ。かく小匂アヒとまふと伏ハタハタやく。

正副の對法にて、源氏、又のわらべをうつて、照應なり。又源氏、もと相副て、役仕大臣をあくして、日本どもを助けあやどり。されよ正副の對法なり。また二條、大臣弘徽殿、皇后御坐を河へもく。源氏のゆ族とは、中のよつねさゆよどみにて、お宿の種子とうる。是いとも、主客反對の法をすそと、又は上ハ何半もめでまく。かくひて、お宿の中代女^{タチ}の主^{ミタチ}である人ある。モ又^{ウラ}、末摘花^{スカサハ}もとづかく。がくちうきく心もおきまくる人を呈きて、坐^{クニキ}と紅とむくへる。又も反對の法をきて、スルくのうをゆく出でくとも、多くふよりて、一やうなうべ。まぬぐくもくとて、出でくれる。中よ六條の息所のゆどくもくするハ、ひくくめづらうなり。タ部^{タヌハ}もくし條、ゆくのゆどくもくのは、といひ出く。もくふかくひきる。まく、又^ハ、變化のゆきよよくして、あくまくれる。まくかくもくもすくがくういがく。諸とも、もく人をだあくねぎだ。ちるうふホホ、あく葵^{アキ}、まよひくつて、もくめて、お坊

お佛^{オボ}息所あるまく、伏線の法をうつて、伏線の法は奇^イじに力のと、又朝日^{アサヒ}の盤元^{ハシマツ}も。帝本^{ヒメノミコト}や、隣の方もて、女房^{メイブ}ともれ源氏、ものとを併ざる語^{ハシマツ}も。みやもせねど、さてゆく小頭^{コトハ}がゆく。これも反^ハド法^{ハシマツ}かく。一人もゆむすめれ候^{ハシマツ}も、伊勢へりうみひ。一人ハシマツ、葵^{アキ}の御院^{ミヤマツ}立まくがど。伊勢と葵^{アキ}とお對へるもて、件の伏線を引^{ハシマツ}ひゆるやがくとあられり。さて又葵^{アキ}と小^{ハシマツ}葵^{アキ}の車あくもじれずふよりて、侍やくがくのいきすくのゆをりひこむよつて、葵^{アキ}上ハみまくらきひ^{ハシマツ}と。よう。源氏、ものと自^{ハシマツ}所をうとみまくを恨^{ハシマツ}て、つひよ伊勢へりうみひ^{ハシマツ}と。伊勢と葵^{アキ}と葵^{アキ}と株^{ハシマツ}と對へるもく。さておのまざれの一^{ハシマツ}くわら。いもくかくもくわらあた。ときをもがまく。ハ、はくわくせん^{ハシマツ}ひうげよ^{ハシマツ}や。上條^{ハシマツ}ふりのび^{ハシマツ}と。御^{ハシマツ}ふくろふよりて、源氏、王太上

天皇を小准アレタリて、こゝの御事と申すをせりあきのまほよがまくす。や報應
をかんとて、女三歳のねれまどきをとうせらる。こそ照對の法あるナリ。
おのづゝ教説を示するが、さうもよあへりや。昔よ圓鏡、鏡あるハシモと
さの照對あると、とくに、ふくらむとて、いとくふくらむのとて相本君
ハニの年はあらひつたりて、ほひようせす。やまく度せぬハタ君もむ
えくらう。彼仕大臣の後ハ、お捕、大臣の方ふ室をもるがども、皆この報
應のたゞりを示せるなり。又、夕彰もれうと見して、よひくる。浮舟君の
うごめんをむくすも、照對の法にて、なうやぐの院と、う院と、ゆしと、深
氏、毛と頭、中持と二りとある。葉君と匂ふとせうと對へ。三條の君は
八月十九日と、三條の家は九月十二日と、伏對へ。昔よ御車小のきて出
きゆきゆかきつて、もひくへ、照對をもくせらる。そと一人ハ、つゞみの

「まふどう教説」人ハ、こゝまふうすと、れうかども、すべて圓
キ、づくひある中、小半とて、るんあた女。よくまよじ、いと、遊をやくもせす。
さて、夕彰のたゞりを、むくづく、ふくらむとて、御車と對へる法ありく。
義理と、事例と、東西と對へ。大内監と、左衛門と、のむくづく、あらびくと
むく、長谷、まと、小笠の君と、むくづくと、アキアラタハシ。そして、又、須磨の
うづくひハ、源氏、毛のち、れ喜へをかんみゆきを、もくく、毛臣を、下す
場をあくべく。小山と、良清小野、上ひのを、かくせらる。これの伏案
立てを、須磨の毛と、かくべく、結構の法く。こもと、伏案でも、かの石と
寺と、須磨の毛と、かくべく、結構の法く。高麗の安安、たゞと、多よびし。
又、花宴、まと、相意、寺の法、代めうだりて、源氏、毛の毛に、さくらの毛と、
をあくべく。様よ、匂ふ、毎月とて、肉、筋、おののあたま、それと、あく
さくあきと、さて、やくの、つり、つじよ須磨よ、さすへまく、毛臣

入きむくとて、りうたかづたをうしゆうとひよおへうすまくと。秋
の日ふよせとあれまふ。第三年の八月また。わて年高一歳よそとくれ
るハ春の花よりでたさある後だ。秋の月ふとけみてくらふて盛裏
の周縁を。ほんかよしてやをとく。それいもす首尾相應する法。
ち不外かも。はゆる年老てとくじゆく。近に五人のもとどふと
あらんをもく。情士は女めがくらべり。大學の儒者のかられ
あを思へる。じゆのを尋ねみれり。今までも。のみはなりとよ
半年。じゆどもこまうなる。じゆも。もやまくの評
新といまきびとく。はゆくめ大あくとみとく。さて半が中ふ
もいみどに。はき隠すをきてあづく。すぐて復と署くれる。せうのこハ
いともあで。いともあづく。やまととかく。古今ふじう
て。がるまづらひのいとたまハ。他ふ又あると。こき。省筆法のいみじ

きのふてがくとくもめで。御とくにたぐの道もふ。ともかに
佛說あく。法りりて。あぐ用あた半をばく。まくれど。このを度の
さくべにゆくを解き。ゆのあたも。いとくも。くわうなどといひ。人を
まく。てうのほく。あたぬをつくすり。くわうなどといひ。人を
いそゆ。大海の一滴。ふびゆ。のを。うらぬ。もふ。いとも
あぢたあく。うるひ。う。持。お。後。相。事。まよ。立。衣。の。う。せ。き。る
を。幸のい。く。歌。たま。く。よ。う。す。起。され。う。小。楊。生。妃。の。く。あ。と。ひ。き
り。う。ま。う。ま。う。も。れ。つ。て。か。く。も。く。あ。う。ば。そ。と。と。ま
く。と。よ。す。う。り。一。半。を。載。く。ま。う。か。う。く。小。源。氏。衣。の。ま。ら。う。と。出
り。て。き。れ。ま。う。ほ。ほ。ま。う。ほ。う。て。ま。う。の。う。せ。ま。う。こ。ま。う。お。唐。代
主。と。あ。る。人。の。ま。う。一。人。う。れ。ま。う。ま。う。や。う。て。光。源。氏。の。ま。唐。き。お。唐。代
下。う。あ。く。と。て。幻。美。こ。い。う。う。て。五。月。よ。う。十一。月。ま。で。が。の。些。が。れ。お。唐。代

かてひまながたきよすとをもつて時々の月にあそぶよろこびます
ほまれる趣いともかのうれしき。此は物語のあよ。源氏もも
やうでかまひよざんやうかれる。まよ。やあをひくる。辰巳とてたま
をうよよまびうとまふふ。かくへねきすれやへばよ。とりよすとよこ
まつを。やうてまのちよおきそる。相あわまとせよかのふゆくわ。よ
めぬ。あくびとあきがくならんて。源氏君おととし御所をかく
まづたは梅とせられる。ふざひあくびながら。がの幻きのあふ。ねふとす
ぐる日日とあみまふ。年もこしがちもくやつれむ。とりよす、ばよ
つるよ。ひよし。源氏君の辞せめん。さすて。やうでせがくれまづだと
示へる。さてを思、をせん。とぞもく年月とくあがたて。匂え
きのねふ。まくらをまくらす。とす。まくらのほす。のせども
つら。まくら。まづひ。ひちくわくわくと。けふ

爰深橋をすこして、手をとどかへれども。いひあらばめでし。ハ先
この内法はまくハ。故小菴もと匂みとの傳を。匂みの出がまく。
橋殿をより。ハ。まの殿もと匂みの出本。故すくふるに。こまくよつて
源氏のゆきかくすことがくすく。まくとハ。とみあいくまくうそ。いともえ
やうたあそかく。人情のまうぐれむがくすくのまどもを。いとくうちに
ほく御くれるかのふく。ハ。まのをふわびて内法へ。門前うき。うだて
小方うせまし。娘もくらせみす。ごとたすけふを。がくとくとまのゆ
づくひよつ起りく。佛の内法も志かく。おこみひたゞきをせすよ
き。又。まきの極あきのまとほのゆきうて。身をあげたあくらひ
なまくまよつ。ひ小佛のまくら。まくならうて。ぬまびふとて。学
治へねく。まよつ。又。大娘もとの中。心を。ひうで。やまよ。を。あくらひ
お身をすく。いとくとまくと。あまきあくして。おとむ

湯と。まくとぬれり。さてかくと。まくと。おもすく。佛ごろのまく。
つひよ葉思ひ大娘もと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
あもせちうまくと。体。わよ。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
せまくと。まくと。大娘もと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
の浮舟を。浮舟を。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
わく。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
いづまくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
ハ。かの源氏。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
まくと。おふく。今。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。
まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。

あらひバ・小鳥のむすへからまくまくよあて・草ふ毛のまゆ・小鳥
さくまうりとふぶて・すべて一望をもとじやんらまくるハ・鬼神もふまくす・ド
たまづくひとりかべ・がくふとせせ・おほ・よみもくくる後もさうむき
ぐく・のくわくわく・えくわかへーくで・やまとどもく・いざびらわく
ふくわくして・竹情のま・まわりあきよ・あれ・ふ語のま・とりまわの・うれ
そくらまくわく・こまくわくわく・あくとまくわくんわく・とわく
なまきと・えびめのい・じたわく・まくらねりのふけく・まく文章
小筆を省く法ハ・じくをいとひく省く・かあべ・も省うで・はらあくぬ所
よそ・まきと省く・まきと省く・おあ筋の文ハ・ぼよ手や・くくひくるゆの下て・
俗ハ・りかゆくと省く・あくと・やくと・休なまき・バ・おゑよ・ハいともじく
えや・やくと・えかすくよくと・ももくわくと・筆を省うと・くの所
など・ひとまく・がくてもさひよ・ぬすうぶて・筆を省うと・とくの所

その本性をあらへ。ソナーハリハラアラウカレルの文也。ヒカルカラ
トヨムナムアリス。ヒカルカラヤマリハシヒツヌムのをも。
カクハシヌムサテハ行をアキハヌーもアホド。既ニ麻木ナキテ太
上天宮の御子光天の御子をキルタヒル。セムカモ原をもす
スルナミバ。モルモハモスレバ。ナシテの御はル。宇治をうる
シシカの御モロゾドモをシヒツヘスルモアリバ。カムモカム
ジヘアリキナム。其辯情のうだうなたこと。まことていまんやうと
ナリ。セムヌヌ浮橋とアラヅハシテスル。シハ様ふりモスルゾム。
此御身よちる。シハ。シナヌギトモスのきをアハメテ。シジマスル
トカレハアガ。ナシバ。源氏天の統をアシム。幻をヨ^カリ^カヘ。妄幻を
クナムキテ。法をアラヅハシテスル。おがく。がく。シモカムスルメで
キ。すべて此御徳と。セヅヘスルに。シヌのキスルカ。がいあひのくせ

おめひもうちぬキヌアリ。モニツハサドフシナリ。モ原とヌ浮橋
美れホトムヌ。今ニツハムアヘヌ名モナシテ。シトキテルノ
の御を。ナシテモシカクシテ。トスルト。六條御息所の事を伏^{フセ}アシ
トシ。既ふくろひのへる。ソシヒアゲル。特誰ともいひ。アキスの
キスとアモカウダ。出^{ハシ}キスると。後モアホの事とちホ極^{ハシ}キスの間
小。半モと省うきスル所と。この名をつみれざる。六條御息所の御
トイ。上條小かくもいへキバ。今ま^ハシテ。真本核^ハシテ。ソシモ
そも先^ハシテ。美のよりして。エヌモアホンとアケル人。ヒトシナ
ク^ハシテ。雲^ハシテ。アシテ。トキス^ハシテ。小かくも。ヒタシ^ハシテ。シモカムス
モ。シモカムス。シナリハシテスル。アリ。モアホ^ハシテ。アモカムス。シモカムス
シスの思。内侍のうすなをうて。日暮りあが入内^ハシテ。まん半^ハシテ。
マクヒトヨリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

ありしもをいひくと、さうと、さうかね
さあようたりて、けまゝ人のやまはよらひゆきまくるをあふる。盤も、
ちぬの既よみき、あらびゆるをうにゆるが、ねだまつたがことで、
内小まゝめきんすもかへる。くよあまゆくわくま、
きくど・きくももつてみあへねば、とうなき、あくまうも、
くすく・きくにあひのかふく、きくめハ行くともあきぬを、やくく
よみかく・やくまふが、ちねあたてゆまくふど・おゆくまぐふ奇し
くゆしきてあすくのゆど・ゆくも・まくへやくこゆくとがいも
ぎくと・あはふたりぬ・どりくと・あくまでまた出るより下ふ・大ぬ敵
ひもひとかくへるをあふりてなづく・さりおもすくは・とくばん
なく、がんのあらひが、ねがうり・ともどめてあへりやれど、いとも
巧あるひのふざくらうる。こまく反覆のみぐれ法ふで、いとらまく

おひくわる女のまゝで、虎むやみをもきらう。おふれをも見ぬべし
いきやひあうといふが、おもよほすりどもをかくそむべし。大うさ
うねうさ。このゆゑにれ中ふすぐきてめでてんとくわうりうる。おもを昔
よのめおどもふ用あらまとば多くいをきつれど、がやうのうはくも
もとつあられびて、なやざりふ考ミスグ遣される、いとへあくこもき
まうむふなんきうる。今まういそかくひくさんへ、うきあぐいとを
がまうきどかくまうくに法ありまきと、まうれんがあくびがくで、うけ
ぢうぢうて、まうまうまうとがくうんざるふなんたふせふも。これやれやと
れやれど、まうまうまうまうとがくうんざるふなんたふせふも。タチ
さくまべ。一巻よ一巻の法あり。一巻よ一巻の法あり。まうまうまう

此物語のうちふ・春夏秋冬・をかづふ・とまづふ・えん
かうやびる詞おもてして・いひめぐらば・誰もよくわざずふ
て・いまとしれ草ハ・こゑをのこ額キリホメ小當ホメく・名文ありたなどいひのこもと.
独生ども・おもてんをかきくる所ハ・あるがむふとおふぞらの詞を
のこむひとてかきてるふ・あべ・みかやけ・かたあべ・の
ふよありせて・本がれあはきをゆくさんをあきり・帰本巻よ・おの日歌
のあけ・あき・さみ・成すきるふよ・例のあてんをあきり・
えんふもすゞ・ひそかにやうたりき・とあきをねひらめてあれり.
あやめおもこれれあると・お小振ふ・
引かれてしきれとくわう・おセカラ・
さるのせりめのさあらば・ちうはよ・ハ・いもぐとて・さふかく押サシナしてせ
きくらふと・事をまんきぬ些文の例多く・他にもさる數ひわ.
あとへば・今世小芝居とひまとす・代々もと・やまとりれよ本などをとれ

アリス。又モキヨ御用事ある所のまへあど。など。作り。うそへおきて。
さくらもやさすをのどあひ。さまで。かくらふりで。くらべてねを
きびと。事がれまとくらべて。やる人のいとも。かうにあれ。やり。や筋の
さゆは。ほんあく。で。うれしき。元の盛よ。怨靈をうへ。堅く
あたやす。だる堤の法。あどふ。せん。おきく。難をかの。
うづきよ。誰かがふと。おされづ。て。おぬのうへを。わる
ふのうどくも。こまぶひとく。みかやをうへの。あく隨ひく。いじく
うれしき。かひの。おふもむづく。ひよちられ。ごきと。のほん
のくらん。がのせ。居よ。ほくあく。く。のけ。おけ。と。かくて。ちやん
く。んが。ごとく。いとも。を。ある。こぎな。やう。そく。と。近。き。そよむく
な。ど。の。文章。とか。か。おき。ば。おぬ。ちあど。さる。うへ。を。かく。く。行。あど。ば。
く。うへ。こ。かい。お。く。か。い。さ。う。だ。う。け。お。う。の。ま。と。く。と。く。ば。ち。

文章とぞりのたる。それが學びのとあるて。見るにどうぞもとうらうみ
て。ことふをとなく。事あくもうて。かくはさるねをとて。おこなう
ならぬあら。學びのとある。かくはあくれど。あくともの。我
皇國の文章とぞひそんハ。かの牛の毛比一。あらとうさんわざ
と。何れもあくまなす。おぬきをやくとのやうがきとくとおひあう
かくばい。でさるまめびのとやうがくに文じもをあくゆて。と。法を示さ
むと。かくもつて。はくとやうがくとよみ試へと。おぬけとおきての外。
こまくの法れあく。文章のちんとなくべたものとくわな。かき
おひこうとて。ばくよ。せきをちくわく。かくはくをうるあきバ。文字を
あくへばく。かくはく。諒がくと。かくあて。かくはく。かくはく。中
みドウたさく。かくはく。かくはく。鶴の毛だをくわう。カモアレ
じと。かのうもあく。かくはく。かくはく。かくはく。

あくべうん。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。の注
釈ども少く。かくはく。あくはあく。かくはく。おどり。かくはく。かくはく。
かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。
かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。
かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。
脉をだらひ。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。
かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。
細流ハ。法およき。かくはく。かくはく。かくはく。かくはく。

頭書評釋凡例

〇六十八

一 さうじぐの抄どもの説を舉へるハ舊注新註をひそびみか□から放ち、
圓き圈の中ふもすけ目を一字づちよ。余が今あくま注する説ども。
あくま。訛ハ本文の通えざるを訛りてゆづとむすり。がきこの注をも
評訛と名づけつ。

一 先達の説を用ひる書同の標をこゝに表すべし

奥源氏奥入

追注奥入追注加

水水原抄

紫紫明抄

最源中最秘抄

宮内少輔藤原伊行朝臣作
京極中納言定家卿補注
河内守源光行朝臣

紫雲寺素寂法師

同作

河河海抄

四辻左大臣善成公
一條禪閻兼良公

花花鳥餘情

秘源詰秘訣

和和秘抄

不不審抄出

祇注帚木別注

圉哢花抄

葉一葉抄

細細流抄

明明星抄

孟孟津抄

岷岷江入楚

宗祇法師

同作

肖柏作

西三條右大臣公條公

西三條内大臣実澄公

九條禪閻植通公

中院中納言通勝卿

■岷江入楚中一說

西三條實澄公說通勝卿記聞

巴紹巴抄

里村紹巴

■萬水一露

能登永閑

湖月抄

北村季吟

湖月抄中一說

箕形如菴說

抄湖月抄中一說

季吟記聞

拾源注拾遺

契冲法師

新源氏新釈

岡部真淵

國王小櫛

本居宣長

補玉小櫛補遺

鈴木朗

餘源注餘滴

石川雅望

雅言集覽

同作

雅譯雅語譯解

鈴木朗

已上新注

此外小字やさあぐの注釈あつといへども。若よりうむゆと用ゐるが、ぬりの。又今余が凡ざらかまづくへすべてをせど。右の中小字。雅言集覽。雅語譯解。此二つは、妙傳の注あつて極く多く、妙傳の雅言を解へるやうにまづばらふくそへつ。此がよしらす。某書云。まづ某名云あづ。おのくも名をあづちにて記し。又そりく或抄とく引く。妙傳の書入本とりて抄のや小引等する注す。誰人の抄とも知らず。本居先生の書入本とりて抄ると。全く因すとてあるので。さて右のおどもを引用へるやうに新注をこなす。もふく省きく。とぞ要とらるてこの本著しゆと新注をこなす。もくもふ小字ハ付不多く。やもむら上よりう。

一
舊注のうち。河海花をあづく既よりもまづあるとの弄花細流などよ

さうかがうなまくはるを。後の方をすくめと舉へると。
玉小桺小縫（タマコシタマシ）してきたの方をすくめたところすくあらよ。いそれから
まくとよさるといふ。緋（ヒ）も。後ひざたるねどもハまたのれにわざりうき
半（ハーフ）と。又やくまつるもあらよ。よだくもすくまば。今ハああがちよ
そのお後（アフタ）で。車のすばれ。穏（ウカル）にすゆるをりゆう。かと
より彼（ヒ）の背（カムイ）をすくは。またの方をのこす。まきだもさしたのおよりも。今
少（スル）一歩加（アシテ）てあるをあどり。又後れ妻（アフタツチ）によとう坐（スル）。これらも
やむとせぬあらぎだり。

一 番注新通（シンドウ）とも小解（コトハ）すすめ。がふとゆゑをやづ。も解（コトハ）のいふ
ごやちびとて。やがてかくさうあらびく。団（ダム）おりてたあづ。
や達（タマリ）もを改めく。おひが秋（ヒガサツ）の下よたへるやくあり。されどうづ
ちくまを下。ひとうばくをかとばとく。こまかひと快くぬるぎあれど。

一 諸注よりとまくする説の、りづまむの圓（カク）であるハ、詞みどりと考へ
得（タマリ）。とすとて。かくさうあらびく。がーものとさべ。外釋は考く。もくねがほのこ
ろによーと辨へり。ア。

一 諸注よりとまくする説の、りづまむの圓（カク）であるハ、詞みどりと考へ
得（タマリ）。とすとて。かくさうあらびく。がーものとさべ。外釋は考く。もくねがほのこ
ろによーと辨へり。ア。

一 釈の長（ロホ）。既（アリ）す。小ぬまつ小口（コトハ）。既（アリ）て。諸抄の説を并へり。べくまと
のある條（トリ）と、餘釈と号けく別小（コトハ）。さもども本文のそれ。かくよ
きもと名がくに所（シテ）。ち見をいともばひまする小の説をと考く。かく又
語の類例。抽本は根源。或ハ儀式調度の故実。あどさして。が文の脉（ナリハ）あが
くぬ半（ハーフ）。かく餘釈小ちよー。

一本文の傍（カタハ）。小ちよー。俗言の傳信（タヂシキ）。どもハ。既（アリ）すよ。の傳信義と傳（タヂシキ）
語釈と号けく。づらふ。字語のかねらむ。こねく。皆すづきとま。

説をあげ次第余案オカスをもよしてやまびざりて補ふ。

一舊注新注をいそぎとくに説あきじ事のせんハ其要とある事と
摘要してはまよあらず。今解もとて此解新小なり。

一餘解語解とも小いづく解べて條どもハ諸説の説を多く舉て。後半
余考ホシをほむ。但一諸説の中より海にらまつづりとがひやうあればその
よろしく説のことを考く。他をば畧まつ。又彼ホカ因ホカ無ホカなつへ。さむの説
のことを記し。いづても解あるのこらうめるハ。と。余考オノのことを記し。

一文章を批評サダルする。我宣國の書ミツニはをもくさん。今始
めてものすまゝある。もとあ然りく。がまふあくひく。もよ、
上條カタナ既ハリ。モ法ハルのかり也名ハシメどもと。こゝよ舉て大ひひを題
も。これハ。初學のこゝをばとなく。さて此ナ同ドもハ。もくもよいと
ちがく小とあるもあり。又皆後文の記よきよりとるを用ひるものあり。

又今あくふオカ余カスつれもあもど。事のこゝはれもやうやうにを主シテ
とく。うあぐちふりうの例格小拘カバ。アシム。アシム。アシム。
りかくもべう。

主客

人と人と相對ヒカひく事ある時。やもゆとあることを主シテ。その主
くる人のきもよして對する方を客シテ。こゝ不よりて。其所の文
小内外ウチト外ケギ差ハズあり。又やもゆ段ハタ小つたても主客の法ハ。准ス。

かくべー。

正副

軍ツキを出ハシマ。大將軍と副將軍とあるがハシマ。この主とある方が
正ト。それ小附屬ツキシカ了方ハシマを副ト。されよつて文法ハ輕重ハシマあり。

正對

人ふまれ物事ふまれ因オトコの事オトコを相對マサニ。優マサニア芳オトコアムヒを正對マサニ。さればマサニ小對マサニともさべタマサニ。次の又對マサニ小むマサニへく西字マサニを加マサニてゐるのみ。

反對

さればマサニ年マサニの反マサニてよ相對マサニをりふ。キマサニバ。あマサニると日マサニてると夜とマサニとなどマサニ。年マサニ因オトコの事オトコといマサニ。表裏マサニ小對マサニがりく反對マサニ。

照對 照應

この二つ太マサニの因オトコはなまマサニ。照對マサニ。一事の相似マサニを再びあるとして。前の年マサニ相照マサニ對マサニをりふ。あマサニと月マサニと東西マサニをあマサニいがマサニ。照應マサニ。年の出マサニる年マサニの年マサニ。あマサニなく消失マサニ。再び年マサニ脉マサニをりふして。あの趣マサニは相應マサニくをりふ。たと

間隔

夜マサニの光マサニをうけく。日マサニも早マサニも光マサニをもあマサニがマサニ。

この事を語マサニりてゆく。ちく少マサニづけて、いとやく煩マサニしくなりて。ほん人の倦マサニと成マサニひたちうりて。暫く切断マサニく其間マサニは他事マサニを挿マサニ隔マサニをりふ。あマサニく遠く海山マサニをなす。所マサニへやうのへづらで。なうふうにをりくらやうがマサニ。此法卷中マサニよ持マサニ。

伏案 伏線

あの二つが下マサニの因オトコすく伏案マサニ。よりよづるマサニをらひ揃マサニ。ひそかに其端マサニをあマサニいがマサニ。伏せおくと。伏線の線マサニゑすがマサニとよむ字マサニ。遠くいそぞらの端マサニを伏せマサニ。をりくら縫めマサニ。りそぞら。ホ小至マサニく結び竟マサニ。時マサニをあぐらをりマサニ。費マサニきく。あひめ悪く跡マサニくとる。又結構マサニといひる所マサニあるも因オトコ數マサニ。

結構ハあらざまへのま。

抑揚

抑ハあらざまと揚ハあらざまとみて文の勢をとなし法あり。あらざま
柄確の頭カラウスを揚サキんとて、ハモ尾アモテをほのく踏抑フミオサみつがして、事が
らばほよく揚ゲてほんとく。あらざまと抑サくかくをり。

緩急

字のどく緩ユルきと急セキいたとて其事を叙ると緩ユルき附シタカハ聲シタカ有て。
なづれ春日ヒマツクニのうつらうる小處女子コトコロコトノコトの野邊ノベをやくざぐとく急セキき
附シタカハすまやうあして野分ノブキの風カキは梢シラメをよれそきとくぞうとく。答
えのふきあひておもぬ矣タフたり。

反覆

事の急セキふうシカがつて、おの勢カタチふりくべきをえあるハコカタチと

あら反覆ウナカヘして、あらんくよむりひのかねまと終シテせんくあく。あくハ
あづくふすみシカづる月影ツキヒメの俄ハタ小かたくありて、折ハサみドクく
もあらむ立タチのあれ、うちまちふほハホあらんごと。

省筆

事の長ロハを死シテをいづく約めく。前後アヘの事モノ小トうて、かくと
々人ヒトよもよもシカり數ヒト他ホタカ少シカくあらシカまき。人のね活リハタクの中
よりそく、も難シカをあらシカめ、或ハ煩シカくシカたをいづいて省シカくの
類モノをすべて省筆シカといふ。

餘波

大イじに事を盡シテする後ハモなまづのりあく消失シテんると
惜シカく、もろに死シテて引延ハシく類モノをり。餘波ハモもやる
かく、もろにて大波ハモの門ハモから波ハモをさばく遠アタサ。

小潮の送りてやるリ小引マサニをあよ壁ツクシへてり。

種子

これれのね徳ハタケが間ハタケつたあを時ハタケ。お一つとくゆく。ね徳ハタケの種子ハナビと
もるもる若紫ハタケの雀ハタケ子ハタケ女ハタケ三ハタケ宮ハタケのかハタケ猫ハタケの敷ハタケひめハタケ。

報應

あまハタケハりとゆきの報ムツイの應ハタケどり。此事ハタケの報ハタケ小彼事ハタケをあまハタケで。
カの道理ハタケを均ヒトドレす。

諷諭

今ハタケの現ハタケはあまハタケの諷ハタケ。一ハタケの事をあまハタケし。がのハタケとどううと
諭ハタケををりよ。ごの二ハタケハ作者ハタケの心ハタケ中ハタケ小あまハタケす。と推量オレハす。

文脉

語脉

文脉ハタケとハハタケ詠ハタケかてゆく文章ハタケのすゞハタケをり。語脉ハタケハ語ハタケのからゆく

すハタケらをりよ。此ハタケまハタケらの續ハタケきて。事ハタケのことをせうに通ハタケむと。人身ハタケ
脉ハタケ、りさく。体中ミハタチを身ハタケを通ハタケむるがハタケ。又伏線ハタケの條理スダを。脉と
じひくるふもあまハタケ。どハタケハ別事ハタケ。

首尾

事ハタケの始ハタケと終ハタケと。これハ首尾ハタケあひハタケあひて結ぶふをりよ。たゞまハタケ。
西ハタケくハ首尾相應ハタケを。どいそでハウナハタケねとハタケ。と。皆ハタケいひ
なハタケく。小海ハタケく。首尾ハタケと。りよ。これより下ハタケ。舊注ハタケどもふいぞれ
くハタケ名目ハタケのまハタケあ。

類例

其事其語の比例ハタケ。他ハタケ書の語ハタケ。奇ハタケあどハタケと引ハタケく。類例ハタケと
いひあへり。こまハタケハ注法ハタケの目ハタケ。

用意

こま」ハ作者の言を用ひて。すふおつむらて。まあづく。さうりた
あつふす。せいひなづく。ひそりきとへば。まほのまほよくか
けけふうを。用ひあり。どりふ。用ひゆべく。

草子地

物語の中ある人の言ひで。他より詳ぞ。草子地と
りづ。こま」ハ物語する人の語よどうか。作者の語く。の中小
草子地あづく。あづく。も。物語の中。せんのむなり。りふ。所なり。
また物語の中ある人。は。向あづく。実ハ草子地。よづく。すあ。こひ
きうつ。す。

餘光

餘情

餘光ハ少しひと訓むきふて。文外小才をひて。じひあく。味ひある。餘
賞てり。餘情ハ。半。意。す。小。才。う。だ。う。あ。れ。の。合。ま。り。で

ゆゆきとりふ。このゆうは。昔。小形。あ。見。半。あ。ま。ご。ど。え。お。ふ。む。ひ。ゆ。
う。い。み。づ。く。詳。せん。く。あ。よ。と。う。ゆ。く。る。の。く。

本文譯注凡例

一些の語の本音。ハ。お。小。様。よ。云。ギ。ハ。む。一。河内。牛。とり。ア。と。表紙。とり。ア。
大。き。ニ。や。う。き。一。と。ど。セ。中。小。室。家。中。納。玄。の。ギ。が。る。を。か。く。ち。う。に。説。お。が。
べ。く。よ。だ。う。を。い。そ。び。び。く。が。く。ま。ま。義。紙。の。く。体。と。く。れ。く。よ。か。ナ
コ。ハ。い。よ。が。や。り。ぎ。ま。れ。が。ふ。か。よ。と。あ。た。ふ。つ。と。く。と。と。う。も。す。く。ま
く。こ。お。ま。か。か。く。い。ど。と。の。ゆ。よ。と。う。て。と。う。も。じ。か。小。ハ。あ。い。が。く。と。や。と
い。と。う。う。と。
固。本。ハ。お。い。づ。く。を。ま。か。と。や。お。が。く。し。か。ま。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

異なる事も今世はとて。但一紹巴抄とりかねよハまた書中比ひ段の
やうあり。といふ事。中比ハ。ものと活用を用ひ。や。され
ば。かくへもせよ傳き。ゆの中比ハ。ものと活用を用ひ。や。され
かくもあき。かく。吳本とて。あき。し。我までも。すこづの事も。
くすふすたう。あき。今。が文ハ。互に校へ合せて。そのようへん
方小字をひそめ。そ字。小字。萬水一露。湖月抄の本をも。小
字。校正されると。餘漏小字をつゝ門出る。あひすゞにて用ひ。
なべひらくあき。あき。バ。よに本ども。あひ。あひ。ど。がのぎ。とね。ば
い。う。さん。後の人をや。校へ。と。ど。

一校へ合はる。や文ハ。余。ゲト。とらへる。方小字を從ひ。かの。と。き。ど。彼此

こも。うの。と。が。り。ぬ。あ。れ。吳本の。う。き。も。右。旁。小注。と。イ。え。く。と。あ。く。う。

さく。と。ち。く。く。誤。ま。ア。と。か。く。く。と。さ。く。く。ふ。注。と。れ。
け。て。う。こ。り。と。る。と。誤。ま。る。數。ハ。い。と。多。タ。ク。き。バ。と。く。不。か。く。く。と。の。と。
ゆ。り。く。き。う。見。方。ハ。か。い。り。う。又。估。詮。あ。ど。み。と。く。が。い。ど。の。辭。ハ。古。た。字。が
ど。も。な。い。太。う。と。省。う。る。但。と。ア。レ。と。多。と。こ。き。と。小。よ。す。と。竟。か。ハ。て。小。字。は。の
格。を。ま。え。得。う。と。と。お。ま。く。ね。る。も。半。身。と。あ。い。だ。今。ハ。考。く。加。へ。と
く。た。と。う。と。れ。ハ。古。と。古。と。は。う。と。れ。ど。ち。う。得。く。と。う。ハ。半。身。と。れ。ば。
一本。文。小。脱。る。語。あ。り。と。と。て。と。ふ。う。く。小。義。の。貫。う。ね。所。よ。ハ。が。り。よ
か。く。の。ど。と。記。標。を。い。ま。く。新。よ。や。も。か。く。と。と。と。う。り。つ。又。行。ア。と。て。か。も。う。う。
と。う。ゆ。る。り。じ。よ。ハ。も。う。く。□。か。く。の。ど。と。記。標。を。圓。と。と。と。う。り。小。字。を
省。き。ス。う。あ。と。な。と。て。ハ。あ。と。ぬ。語。の。統。と。う。と。と。や。所。よ。ハ。試。よ。や。假。成
補。り。く。○か。く。の。ど。と。記。圓。の。中。小。記。と。う。と。と。や。所。よ。ハ。試。よ。や。假。成
一假。字。ハ。大。う。古。ふ。隨。ひ。く。あ。と。あ。と。う。り。そ。字。小。梅。を。む。め。馬。と。む。ま。

諾をむづあどいよへう。とりひく假語を。むとひふ數ハ。此の後かき
くる比も。既よちうかくうとおぢるて。和名抄甚解ホカのりのしも。もとある
こと。此の後ハ。既小訛ヨシナ。頗まつる音便の詞。又字音の語がどど。
さあぐくかかくする例をもど。こまつもはむめむよとやうふ。むと
かくべきて。もくうあきど。なハ初学の事それ見て。まだ。べたくもいひ
ともたんうとく。ねうとかける數ヨリ。うきうきうう。これらハ作者ツイヌシ
えよさくすうすとくわゆヨシド。書ハ初学の事ヨリ。本文をよ
譯シラフして注をよどめ。とあきば。こまつもやいりをぬちうどく。ま
信の清濁スミナリ。大さ古。小隨ひく点をくらへうか。よほども。小知コノシ
ぐうにハ。多くは清スミヨきのすくふして。おもふ。

一 尔有ニアル半里マーリをなんあう。何止ナニトをなんど。有辨伎アルベキをあんづなど。ふ數ヨリ。みか
音便ふくびきの語ふきど。此の後ハ。そのせれ俗語のすくがれ。の

なきバ。初よりがくふと。せせば今り。聊カも改めば。さて。まきあら。
あそり。あど。あい。ときるを。んをかへくよみあひ。これハ。やせの
詞つ死シテを失シテ。とそのまごと。やまきバ。片假字のンをかへく。とのよくざゑ
をかへく。ちうつ。されど。海シマふ。かへく。ハ。ひづく。もく。て。ひちづく。う。
いづく。もんを加へる。ふよ。ひべー。此數あ。ト。ほ。達タマへ。ちよべー。さて。ま
う。く。ま。く。あ。ど。の。く。と。う。れ。く。ま。く。あ。ど。う。と。ま。く。る。こ。ま
も音便の假語を。諸本。と。が。ひ。よ。ま。く。て。あ。き。ば。今。は。す。ふ。よ。ば。語
調のうへしたよもく。が。い。づ。き。ふ。も。あ。つ。

一本文の左。旁小譯語ウツシヨトを。カのき。と。は。い。と。俗。び。る。も。り。と。小。て。識者モジリビトの
も。も。ん。と。も。が。や。ー。タ。き。ど。此の後を。と。も。く。小。雅。云。の。耳。を。く。て。
事。の。を。成。每。へ。が。ー。と。う。よ。う。く。業。を。講。び。る。も。く。か。く。小。い。ま。あ。小
や。語。の。を。成。本文の旁小記ウツシヨト。う。を。く。て。が。く。て。ハ。い。と。き。よ。う。よ。う。と

りの人の多くもやるふ。モキのまゝ小形エラとつゝをさばかとよりモナシド藏者モナシドふぞく
もづれりのふばかりばよしとうひせよびのま。さてハ女童あらわ。ふとくく
やがて解サトもづれりとくもどるをもぐり。さ、ありど。千年ふちうに
雅語ミヤビコトと今せの俗語サトヒコト小譯ウツ。決くやまよふへんと。先をまわりす
ごくなまく。容易タヌヤスうぬきをばほめ。先達の諱ウツをよ
わとづれて余オ考ノもくく。れきとれきのされ美アシカとくく。
全く相當らぬすゞりあり。故おあくね下カレよハ雅言一語よ。俗云を二
語づあくべてそよう。やゆのきと互よひとすゞりてよふうべ。よつても
行詠カタシタ。がくたふ。ふ某カタシタ。とやく。小説をう。さて又漢字をビ
交カタシタ。けくばと逆カタシタ。とくあきと。今せへ。あぐくこの漢字れ
ううわく。よろづを通カタシタ。とく。大くよがくづにうぎり。ハ
約カタシタ。やうあるべきと。かく。注カタシタ。とく。あぐて俗小用ヨい

たまへるが、あくまでも字の本義小ハナダム下に
よどやくと、ふく相當の字にて注する時、却て和字のまこと
アラビカ字も多きが、ハ日文もやもとひざとあんされど、終りふ
くと、さうして記す。また、文の右旁小注し
て、ハシゴもも字の音なりとある。

此物語を講説せんとするが、雅言と俗言とあひうのべてやうと。初
よりうそいふをあてやとざきば。叙く人のこと。聴く人のこと。い
くべきよとあくまでもくそみ文のことを。傳へ受ふことうきば。此ハ
おのき年ごろ試してかほるする。たゞ本の為よハ。此はウタ
コトいさくやあくとも。りづべ凡てや。こよハつてかほりや。
此物語の文章ハ。さづくらへども。かくとくとく。よううげもれ。す
かわゆれゆれをよ。彼とせと。事のかくもうへく所よ。まいやうる。

けらめなうて、かくのまへ一つにあら年のやうある所あり。まことに文也も、ううへよおへて、倍勢をあやあきする所にて、かくざり小刀くは、そのすきあることある。又かくべがふりべた本をじつも、後へまへて、やまと本とすやうをあふがれる所やう。甚しき所へ紙一葉二ひもをとて、往行すともさうぐる本とものやう。こまくあがめのちどもとへ、こよあくそくさきうる所あり。文章の法とすくにまつて、もとども、初字のせれども、アマサばく假小字の標カシをほもく。やまゆりがれを示さんとへられちと漢文の例よりあくひく本をなすとども、やまく新釈よねぐれをくわくぐく。事をまくくつ。や例どもくふまるとく。

大段落の標ビシ

一事を全く階で竟ハテる界ヒタチ此標ヒシをのつ。

小段落の標

一事はあらへ竟ハテる所の界ヒタチ此標ヒシをのつ。されども皇國言のみハ、漢文のどく、きへやうよふ、かくことなる所もあきだ。されば、太くれ様とくらべ。次あくも回サクサク。

彼と此と事を分つ標

彼カレと此コレと、自ヒトと他ホトトと、事のかくろ所、又問答サドサのまくくつりき所、ある此事をあらへくとあたる。彼事サシを抑シテる所がくの界ヒタチふから點ヒツをかへく標ヒシ。

◎◎◎◎眼目の語カタの標

こまく漢文小字眼カタあどりくまひく。其所カタよもひとある語、或ハは文カタくつひく。うたをあやあく語。よくハ伏線スナの脉ヒダを綻ハラぐる語、どの右旁カタよがく點ヒツを用ひく標ヒシ。委ハシメー

所の點ふきるをばとむるべ。

。・語の清濁比標

濁るうは點ハ常のとく。必清てよじびた後を俗小濁アホれ
語小ハ。點をやどして左清右濁を示し。

・・助辭複語の標

助辭複語のまぎりにハ。左旁小かゝる點をもす。

||| 互尔乎波比首尾の標

こきハいをゆるて小をはの係と結ぶる所の跡ら
ちへたハがやうの點を右旁小あくにされよ依て語脉をくわむ
べし。こきいと要ある。

語脉轉倒の標

語の脉を上下小轉倒^{ウチカヘ}して文勢をなする所のまぎりにかハ。

かみのと点を右旁小引て其語の脉を示す。この點はまれてゐる
所を繼てんにべし。あくへバ相違^{サヘ}のちめよ。每小の方あん。いよ
のんよりほく小^用。おやうちかく。さあすりておのわがくも
やうれふ。ほくもふもおとくべば。ほんのぎりにをも。やくとくもひ
ききでどくも。とあるやくも。ひうへのんよりあるふて。何々の儀式
をもりてあくましきどくづく語脉ある。おやおぐ。まくの
手を伸して語る法あり。されば。點をつだてや。点をもするべし。又
小方かんとあるなん。ばかりてあくましきどくある不結少て。みよ
ハく。といふことを。まと轉へ。どうけくほげくる。さきば。|||
かる点をつみ。や。点をつむ。又よ。あくふてとあるふての辞
ハ。西^キハカリてあへ係る脉ある。をかくもんとて。甲。乙の點を左
旁小様^{シル}。條はくもよ准へくもすべ。行語脉のようばくも

所よハ。——かく二筋の點を引きて、そのすぢを詳るに弊は候ふ
ふをほむくとまつべし。大くもがれ語のゆゑもよむに所くる。
此法をあびて、よみづみはまどよむびごとく。——ふかへて
よまんとするうふ。本のきせきへぐれたり。さきとば候ふよく
ふ得あくべき。

① ② ③ ④ ⑤ 蘭句文脉の標

こきハイとゆる蘭句法の遠く係る所にて上より受ける文脉を
あくしめんとある小係ヲテ断する下小甲をもす。受て継ぐる小②
をもすつ。この點を引合せく。其文の係りする處を解べ。二重小
も二重小の句を畳みる所よハ。④⑤⑥⑦など記して。文脉をもつ。

△ 一 語意を補ふ標

いひ切る語の末ふ含めのうするも。又今世の語にてハ、必乞を加へて

きくじに所あふふやうを左旁ふ注もす。他の説法と紛らで
がくちにがく點の中ふちく。この中ある字の意を抑ひ補ひ
て。その文を解るべ。ひと昔に名比合やりするハ。別小段の
秋ふやあをりす。

右の外ふも。聊づの注例あひどぞら准へてもきやうべし。舊印本など
ふくの心詞は所よハ。某心某詞とある。草子地よハ。地ともうは數ハ。づ
も改めだ。りうのふよ。へくる魚をかくすも。湖月抄の例。あらぐ
よども。上條よりうづごく。

校正譯注源氏物語評釋首卷終

